

# ストラスブールの三島由紀夫展

佐藤秀明 (近畿大学文芸学部教授・三島由紀夫文学館館長)

## 出発まで

フランスのストラスブールで『金閣寺』の展覧会を催したいので協力してほしいとメールで言ってきたのは、オックスフォード大学の研究員になったばかりのトマ・ガルサン氏(現 パリ・ディドロ大学准教授)からだ。トマさんは三十代後半の日本文学研究者で、三島由紀夫の研究をメインに据えているフランス人だ。2017年の夏に、共同研究者として私の勤務する近畿大学の研究室に出入りしていた。そのときはストラスブール大学の研究員で、来日中にオックスフォードの職が決まったのである。その夏、私が館長を務める三島由紀夫文学館に彼を連れて行った。関西から文学館のある山梨県山中湖村までは、車で7時間かかる。そこの展示を見て、彼は『金閣寺』の展覧会を思いついたという。

しかし、文学展示の実務を多少は知っている私は、これは容易なことではないと直感した。一方、山中湖村はフランスとの結びつきを強めていたので、乗り気になった。トマさん、簡単に言うなよとぼやきながら、どんな困難があるかを想定していたとき、学習院大学史料館が辻邦生展をパリとストラスブールで開いたことを知り、相談に乗ってもらおうと私から連絡を取ったのだった。ところが、学習院大学史料館へは別ルートから展示協力の要請がなされていたのである。これは渡りに船とばかりに、その年の11月27日に史料館を訪問して、学芸員の富田ゆり氏と丸山美季氏に会い、準備の連絡を取り合うこと、一緒にストラスブールに行くことを約した。

ここにその準備の種々とその困難を書いても仕方がないであろう。主催者も日程も規模も展示作業の進行もわからず(もしかして我々が飾りつけをするのだろうかとメールで聞き合ったこともあった)、ストラスブール大学のエヴリン・オドリ准教授とトマさんからの連絡に従って、解説の原稿を書きながら出品の準備を進めるしかなかった。会場となるストラスブール国立・大学図書館のファシリティレポートさえなく、ループル並みの設備と警備だと言ってくるだけなので、山中湖村では資料の貸し出しに難色を示す声も出たほどだった(ファシリティレポートは、後に送られてきて解決したが)。

展示の概要も、『金閣寺』だけの展示からもう少し



ストラスブール国立・大学図書館

幅を広く取り、「三島由紀夫と『金閣寺』Mishima et le Pavillon d'or」展となっていった。それに合わせて展示資料も多くなった。三島文学館では、輸送の心配があることと代表作の貴重資料を展示したいという矛盾する条件をクリアするために、図書雑誌、映画演劇のポスターだけでなく、レプリカの創作ノートや原稿を貸し出すことにした。レプリカとはいえ、これで展示内容はぐっとよくなったはずである。

## ストラスブールにて

ストラスブールは、パリから400キロほど東にあるアルザス地方の古い都市である。ドイツとの国境近くの町で、第一次大戦でドイツ領からフランス領となり、その後ナチスドイツに占領された。ドイツ風の木組みの家が残り、その周辺にはプロシャが建てた壮大な石の建物があって、イル川に囲まれた町の中心部は世界遺産になっている。

現地に着いてわかったことだが、文学展は「アルスモンド・ジャポンArsmondo Japon」という町を挙げてのフェスティバルの一環として位置づけられていた。街角で「Arsmondo Japon」のポスターをあちこちで見かけることになる。日本総領事館から連絡が来て行くと、吉川亨首席領事がおどけて「どんどん増殖しているようです」と言う。畑中知美領事も愉快そうに笑っている。渡仏前にわからないことだらけだったのだが、「増殖」という面白いことばで腑に落ちた。この国には、文化は統括したり管理したりするものではないという良識があるのかもしれない。

もともとは、宮本亜門氏演出のオペラ「金閣寺」が当地のオペラ座で上演されるのに際し、オペラ座の支配人がストラスブールの各団体に呼びかけて3月2日から4月15日までの日本フェス



街中に貼られた「Arsmondo Japon」のポスター



ストラスブールライン国立オペラ座

ティバルに拡大してしまったらしい。

オペラ「金閣寺」は、黛敏郎作曲、クラウスH・ヘンネベルク脚本の三島作品を基にしたオペラで、1976年6月23日にベルリン・ドイツ・オペラで初演された。日本でも何度か上演されており、その一つを私は観ている。今回は宮本亜門氏の初演出で、3月21日から4月3日までストラスブールで上演し、その後ミュルーズで、そして2019年には日本公演の予定もある。富田さん、丸山さんともども宮本亜門さんに挨拶し稽古を見学できたのは、お二人の人脈による。日本総領事館とのつながりも同様である。この展示だけでなく私までもが、彼女たちにどれだけ助けられたかしかない。

## 「三島由紀夫と『金閣寺』展」

さて、展示である。会期はアルスモンド・ジャポンのオープン当日の3月2日から29日まで。国立図書館で行われるオープニング・セレモニーの前に招待客に展示を見てもらうことになる。招待客には市長代理、大学の副学長、佐藤隆正総領事や畑中領事の顔も見える。つづいて私の講演もあった。

展示のキュレーターはトマ・ガルサンさんで展示実務は図書館のエマニュエル・マリーン氏が担当。マリーンさんは白木の角材を四角に組んだ大きな空間を3箇所ほど作り、日本文化の「空」を表現するというアイデアを持ち込んだ。資料の展示にも独特の空白を残し、デコラティブな三島の文体との差異を強調し、私



筆者講演  
左：逐次通訳  
トマ・ガルサン氏



オープニング・セレモニー



展示設置風景  
ストラスブール国立・大学図書館員エマニュエル・マリーン氏



学習院コーナー



展示会場

の意表を突いてきた。

この展示で最も目を引いたのは、学習院から運んだ坊城俊民宛の三島書簡である。富田さん、丸山さんが手荷物で運び、私が頼りないボディガードを務めた資料だ。三島とは8つ年上の文芸部の先輩となる坊城俊民は、少年期の三島と毎日のように手紙のやり取りをしていた。しかし、ある時期を境に二人は離れてしまい、音信も途絶えた。そして、三島が40歳になってライフワークと称する『豊饒の海』を書き始めると交際が復活した。4巻本の『豊饒の海』の第1巻『春の雪』は、学習院学生松枝清顕の禁じられた恋の話だが、坊城は華胄界の描写がすぐれたものであることを即座に認めた。「こういう貴族を描けたとは、はるかの昔、紫式部がただけである」(『焔の幻影 回想三島由紀夫』)。展示された三島の書簡には「正にお墨附をいただいたやうなもの」とある。

オープンの日、美しい古都には時ならぬ春の雪が舞い、うっすらと積もった。この手紙をストラスブールでこういう日に読むことができたのは、幸運でしかないと思えた。28日の会期で2100人の人が訪れたというから、これも嬉しい驚きであった。



左から筆者、アントナン・ベシュレール(ストラスブール大学准教授)、丸山美季、エヴリン・オドリ、富田ゆり、トマ・ガルサン(敬称略)

## 佐藤秀明 プロフィール

近畿大学文芸学部教授・三島由紀夫文学館館長。専門は日本近代文学研究で三島由紀夫研究、織田作之助研究など。『決定版三島由紀夫全集』編集協力者として資料整理にあたる。織田作之助については岩波文庫3冊の解説を執筆。近著に岩波文庫『三島由紀夫紀行文集』(2018年9月14日発行)。